

江戸時代の浮世絵にみる庶民園芸の実態に関する研究
Study on the Common People's Gardening from the Ukiyo-e in Edo era

○真野晏州力¹, 押田佳子²

*Asuka Mano¹, Keiko Oshida²

Abstract: In this study, we focused on planting species, places, and planting style in the common people's gardening from the Ukiyo-e in Edo era. As a result, it was clarified that the Edo-gardening was developed both publicly and privately by using pots.

1. 背景及び目的—近世の江戸は、多様な階層の人々が植物に深い関心を持ち園芸に勤しむ世界随一の園芸都市であった^[1]. その様子は当時、最先端のメディアであった浮世絵より、色鮮やかに窺うことができる. その形態や観賞の場は様々であり、朝顔や菖蒲など一部の品種においては当時のまま継承されている.

しかし、園芸の在り方は、近代化が進む中で次第に公と私に分けられるようになり、現代においては私的な空間以外で自由度の高い園芸活動を行う場は少ない状況にある. 一方近年では、公共緑地の管理を地域住民や民間に委託する例も増えており、今一度住民が公共の園芸空間を活動の場とする可能性も出てきている^[2]. ここに、かつての庶民園芸の在り方を分析することは、現代における、住民参加型の公共空間整備及び管理に何かしらの示唆を与える可能性を見出せるといえる.

既往研究^[3]では、絵図より捉えた江戸の花見場において、同じ樹種が一面に広がる場に、人が集まり愛でていたことを捉えている. この花見場は引きの大空間としての園芸を捉えたものであるが、江戸園芸の主役たる個人レベルの園芸については言及していない.

そこで本稿では、江戸の庶民園芸を近景より描写した浮世絵に着目し、植栽された種、場所、形態より分析し、その実態を捉えることを目的とする.

2. 調査方法—本研究の調査概要を Table1 に示す.

3. 結果および考察—文献調査は、国立国会図書館デジタルコレクション等で入手可能な江戸時代の浮世絵全 205 枚における園芸描写において、近景の園芸空間が掲載された 141 枚を対象とする. これらを作者と描写傾向より、「黎明期」「発達期」「最盛期」の3期に分類した. なお、各期における作品数と種数、代表的な種を Table2 に、植栽形態と観賞の場の関係を Table3 に、

Table1 Outline of the survey (調査概要) (This is original table by authors)

調査方法	文献調査
調査対象	国立国会図書館デジタルコレクション等で入手可能な江戸時代に作成された浮世絵の植物描写全 205 枚を抽出し、そのうち近景の園芸描写 141 枚を対象とした ^{[1], [4]~[7]} .
分析方法	対象の浮世絵 141 枚について「植栽の種類」「浮世絵の作成年代」「植栽形態」「観賞の場」に着目し分析.

各期における植栽形態と観賞の場の関係を Table4 に示す. 以降、全体の傾向と各期の傾向について述べる.

3-1. 全体の傾向—Table2 より、対象の浮世絵全 141 枚に描写された植栽は全 59 種が確認され、年代ごとに見ると、黎明期が 13 種、発達期が 36 種、最盛期が 44 種と時代を経るに従い、増加傾向にあることを捉えた. 代表的な種に着目すると、黎明期はウメなどが主であったが、発達期はマツ、最盛期はサクラが多くみられるようになっている. Table3 より、観賞の場に着目すると、屋内が 28 枚(16.9%)、縁側が 12 枚(7.2%)、庭が 36 枚(21.7%)、街中が 34 枚(20.5%)、植木市が 34 枚(20.5%)、寺社が 7 枚(4.2%)であった. このうち、プライベート空間にあたる、屋内、縁側、庭における作品数が 76 枚(46.1%)であり、パブリック空間である街中、植木市(Figure1)、寺社の作品数は 75 枚(44.8%)であった. これより、プライベート空間とパブリック空間がほぼ同程度に描かれていたことが窺える. また、近世には植木鉢を用いた園芸が発達したといわれるが、上述のプライベート空間における鉢植えは 39 枚(63.9%)、パブリック空間である街中、植木市、寺社の鉢植えは 31 枚(18.8%)とこれも同程度であった^[4]. 一方で、地植えは庭で 24 枚(14.5%)であるのに対し、パブリック

Table2 Number of works and species in each period (各期における作品数と種数)

浮世絵の作成年代	作品数(枚)	種数(種)	代表的な種
黎明期(1673~1781年頃)	26	13	ガンビ、ツツジ、ショウブ、ウメなど
発達期(1781~1844年頃)	53	36	サボテン、ウメ、アサガオ、マツなど
最盛期(1844~1864年頃)	62	44	マツバラシ、サクラ、ウメ、マツなど
計	141	59	—

※種数の値は重複を含む

Table3 Planting style and viewing place (植栽形態と観賞の場の関係)

植栽形態	観賞の場							作品数(枚)
	プライベート空間			パブリック空間				
	屋内	縁側	庭	街中	植木市	寺社	その他	
鉢植え	20(12.1%)	9(5.5%)	10(6.1%)	7(4.2%)	22(13.3%)	2(1.2%)	13(7.9%)	83(50.3%)
地植え	0(0.0%)	0(0.0%)	24(14.5%)	22(13.3%)	5(3.0%)	3(1.8%)	1(0.6%)	55(33.3%)
根巻き	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(0.6%)	5(3.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	6(3.6%)
花瓶	1(0.6%)	1(0.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(0.6%)	0(0.0%)	3(1.8%)
水盤	1(0.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(0.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(1.2%)
籠	1(0.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(0.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(1.2%)
花桶	0(0.0%)	1(0.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(0.6%)
不明	5(3.0%)	1(0.6%)	2(1.2%)	3(1.8%)	0(0.0%)	1(0.6%)	1(0.6%)	13(7.9%)
作品数(枚)	28(17.0%)	12(7.3%)	36(21.8%)	34(20.6%)	34(20.6%)	7(4.2%)	15(9.1%)	165(100.0%)

【凡例】%=各対象数/作品数(165枚) ※表中の値は重複を含む

1: 日大理工・学部・まち 2: 日大理工・教員・まち

空間では30枚(18.2%)であり、パブリック空間においてやや多いことが確認された。これは、庶民の生活空間において、住宅の狭さや、庭を持っている人が少なかったために、地植えが身近なものではなかったと考えられる。

3-2. 黎明期(1673~1781年頃)—Table2より、当期に該当する作品数は26枚にのぼり、Table4より植栽形態に着目すると、地植えが13枚(44.8%)、次いで鉢植えが8枚(27.6%)であった。また、観賞の場に着目すると、庭が13枚(44.8%)、次いで屋内と縁側が6枚(20.7%)であった。さらに全29枚中、屋内、縁側、庭の作品数が25枚(86.2%)と大半を占めており、プライベート空間の園芸が注目を浴びやすかったことが窺える。

3-3. 発達期(1781~1844年頃)—Table2より、当期に該当する作品数は53枚にのぼり、Table4より植栽形態に着目すると、鉢植えが39枚(63.9%)、次いで地植えが19枚(31.1%)であり、圧倒的に鉢植えが多いことが確認された。また観賞の場に着目すると、植木市が15枚(24.6%)、次いで街中が12枚(19.7%)であり、黎明期と比べパブリック空間の描写が多くみられた。当期には、園芸技術が市中に広まったことに加え、夏の風物詩として箱庭がつけられるなど、江戸の園芸文化が黎明期に比べ飛躍的に発展した時期であり、植栽形態、観賞の場ともに多様化したことが窺える^[4]。

3-4. 最盛期(1844~1864年頃)—Table2より、当期に該当する作品数は62枚にのぼり、Table4より植栽形態に着目すると、鉢植えが36枚(48.0%)、次いで地植えが23枚(30.7%)であることに加え、他の時期にはほとんどみられなかった根巻きや水盤がみられた。このことから発達期に比べ、植栽形態はさらに多様化したといえよう。また観賞の場に着目すると、植木市が19枚(25.3%)、次いで街中が17枚(22.7%)であり、黎明期、発達期に比較的多くみられたプライベート空間は26枚(34.7%)であった。このことから、当期において、パブリック空間、特に植木市は庶民園芸の交流や流通の場として魅力的に捉えられていたことが窺える。



Figure1 Picture of garden plants market(植木市の様子)^[4]

4. 江戸時代の浮世絵にみる庶民園芸の実態—江戸期の浮世絵にみる庶民園芸の実態をみると、黎明期においては、狭いながらも庭を中心とするプライベート空間での地植えが主体であったが、発達期、最盛期と時代を経るに従い、観賞の場は多様化し、パブリック空間に及ぶようになった。この背景には、植木市の台頭による鉢植え需要の増加や、様々な種を手軽に入手でき、かつ移動させやすいためと考えられる。以上より、江戸の庶民園芸は、植木市ならびに鉢植えの発達と共に、公私を問わない自由な園芸の在り方を確立したといえよう。

5. 補注

※1 国立国会図書館デジタルコレクションで入手したものは『浮世絵大観』『浮世風俗やまと錦絵』『あづまの花 江戸繪部類』である。

6. 参考文献

- [1] 青木宏一郎, 「江戸のガーデニング」 平凡社, pp. 4-118, 1999.
- [2] 東山将実, 押田佳子, 「民友緑地保全制度としての「市民の森」及び「市民緑地制度」の運用実態に関する研究」, 令和元年度公益社団法人日本造園学会関東支部大会, pp. 21-22, 2019
- [3] 西澤真依子ほか5名, 「江戸における花見空間の構成と継承状況に関する研究—(その2)花見描写より捉えた空間整備について—」, 平成28年度日本大学理工学部学術講演会予稿集, pp. 436-437, 2016
- [4] 日野原健司, 平野恵, 「浮世絵でめぐる江戸の花:見て楽しむ園芸文化」, 誠文堂新光社, pp. 10-237, 2013.
- [5] 国立国会図書館デジタルコレクション, 2020.9.10
- [6] 和泉市久保惣記念美術館デジタルコレクション, 2020.9.10
- [7] さいたま市大宮盆栽美術館, 2020.9.10

Table4 Planting style and viewing place in each period (各期における植栽形態と観賞の場の関係) (This is original table by authors)

浮世絵の 作成年代	植栽形態									観賞の場						作品数(枚)
	鉢植え	地植え	根巻き	花瓶	水盤	籠	花桶	不明	プライベート空間			パブリック空間				
									屋内	縁側	庭	街中	植木市	寺社	その他	
黎明期 (1673~1781年頃)	8(27.6%)	13(44.8%)	0(0.0%)	1(3.4%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(3.4%)	6(20.7%)	6(20.7%)	6(20.7%)	13(44.8%)	4(13.8%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	29(100.0%)
発達期 (1781~1844年頃)	39(63.9%)	19(31.1%)	1(1.6%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(1.6%)	0(0.0%)	1(1.6%)	9(14.8%)	5(8.2%)	11(18.0%)	12(19.7%)	15(24.6%)	1(1.6%)	8(13.1%)	61(100.0%)
最盛期 (1844~1864年頃)	36(48.0%)	23(30.7%)	5(6.7%)	2(2.7%)	2(2.7%)	1(1.3%)	0(0.0%)	6(8.0%)	13(17.3%)	1(1.3%)	12(16.0%)	17(22.7%)	19(25.3%)	6(8.0%)	7(9.3%)	75(100.0%)
作品数(枚)	83	55	6	3	2	2	1	13	28	12	36	33	34	7	15	165

[凡例] %:各対象数/各年代の作品数 ※表中の値は重複を含む 植栽形態と観賞の場の作品数はそれぞれ165枚 割合は植栽形態と観賞の場でそれぞれ100%となる